

紀 要

第 16 号

2003. 3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

北大津遺跡出土の縄文土器について

—近江地方湖西南部地域における縄文時代の一様相—

小島 孝 修

1. はじめに

筆者らは数年前から、本『紀要』誌上において、「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き」を掲載してきた。近江地方を湖東北部・湖東南部・湖南・湖西南部・湖西北部・湖北の6地域にわけて縄文時代遺跡を集成して整理・検討し、その立地の傾向などの状況を概観した。今後も新出資料を加えて集成を充実していく必要があるし¹⁾、それによりこれまでに把握した様相を修正していく必要がある。しかし、これまでの検討により、近江地方の縄文時代の

おおよその傾向をつかむことはできたと考えている。

今後は、近江における縄文時代についてのさらなる把握とともに住居跡や墓などの遺構や土器・石器などの個別事項の検討も必要であるし、そのほか、各遺跡の個別事例についてもさらに詳細に検討し、積み上げていく必要があると考える。

本稿では、各遺跡の個別事例検討の一例として、大津市北大津遺跡出土の縄文時代遺物の報告を、一部ではあるが行い、あわせて近江地方湖西南部地域における概期の北大津遺跡について考えてみたい。



図1 北大津遺跡位置図

2. 北大津遺跡の調査の概要(第1図)

北大津遺跡は滋賀県大津市皇子が丘1・2丁目および桜野町1丁目に所在する。立地する地形は、比叡山地から流出する柳川が形成した扇状地である。縄文時代遺跡としてよく知られている大津市滋賀里遺跡の南約1.5km、同市栗津湖底遺跡の北西約6kmに位置する(第1図、滋賀県教育委員会1996)。

本遺跡は昭和46年(1971年)夏に、旧国鉄湖西線西大津駅(当時は「北大津駅」となる予定であった)の建設工事の際に発見された。同年から翌昭和47年(1972年)にかけて滋賀県教育委員会により発掘調査が実施され、縄文時代から平安時代にかけての遺構・遺物が多数検出された。この第1次調査については、滋賀里遺跡の発掘調査報告書に、「更に最近、南方1.5kmの地点に北大津遺跡が発見され、縄文時代前期の包含層が確認され、早期の押型文も出土している。」との記述がみられる(田辺昭三ほか1973)^②。

その後、国道161号バイパスと西大津駅前広場とをつなぐ都市計画道路を大津市土木課が計画したことをうけて、昭和48・49年度(1973～1975年)に、滋賀県教育委員会を調査主体、財団法人滋賀県文化財保護協会を調査機関として、発掘調査が実施された。この第2次・第3次調査においても、弥生時代から奈良時代にかけての遺構・遺物が多数検出された。これら4年にわたる調査の内容は、第2次・第3次調査の一部が公表されたのみで(中西1979)、そのほとんどはいまだに公表されていない。縄文時代遺物に関しては、滋賀県立近江風土記の丘資料館で昭和59年(1974年)に開催された『近江の縄文時代』展において、12点の縄文土器が展示されたに過ぎない(滋賀県立近江風土記の丘資料館1974)。

筆者は以前、滋賀県埋蔵文化財センターにおいて、保管されていたこれらの縄文時代遺物を実見する機会を得た^③。縄文時代各時期の資料が、良好な残存状態で多く認められた。これらの資料を公表することは、近江地方の縄文時代を考える上で非常に有用であると考えられたため、各関係者に了解を得て、一部の資料について整理作業を実施することにした。なお、整理作業の一部は、平成12年度に緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務において、実施されている。

3. 対象資料の概要

今回整理対象とした縄文時代遺物は、コンテナ6箱にわけて収納されていた。少数の弥生土器や須恵器が混入していたが、多くが縄文土器であり、磨石や石皿などの石器も2箱あった。ただし今回整理対象としたのは縄文土器のみであり、石器は対象としていない。各コンテナ内には、ビニール袋にラベルとともにいった状態で遺物が収納されていたが、各遺物の注記はラベルと一致せず、また袋ごとに統一されていなかった。これはかつて整理作業に着手してある程度分類まで行ったものの、途中で放棄された結果に見受けられた。だが幸いなことに、小破片を除く大半の遺物に注記がされていた。かすれて判読不能の部分を含むものも少なくないが、これにより各資料の出土位置の特定はほぼ可能である。ただし、当時の遺構図面類の検討や調査担当者への聞き取りは今回行っておらず、出土位置の特定およびそれに基づく検討に関しては、今後の課題としたい。

ほとんどの注記は「KO〇〇/G〇〇/R〇〇/〇〇」の4種類からなる(〇〇にはおもに数字が入る)。「KO〇〇」は「北大津(KITATSU)遺跡第〇〇次調査」の略号と思われる、大半のものに「KO1」とあることから、第1次調査において出土したものと思われる。そのほか「KO2」(図2・1)、「KO4」(図4・56)、「KOW」(図8・131)があり、これらは調査年次が異なるようである。「G〇〇」はグリッド番号と思われる、1～29がある。遺物包含層をグリッド単位で調査、遺物を取り上げたと思われるが、グリッドの配列や規模については不明である。「R〇〇」は取り上げ番号(袋番号)と思われる。最後の「〇〇」は取り上げ年月日であり、第1次調査出土のものはいずれも「7107〇〇」・「7108〇〇」とあり、取り上げが1971年7・8月に行われたことがわかる。

縄文土器は、縄文時代早期から晩期にかけてのものが認められるが、大半は縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものである。これらについては、口縁部は極力図化することに努め、体部は特徴的な大きめの破片を中心に図化した。それ以外の時期のものはきわめて少数であり、体部の小破片でも極力図化するように努めた。また、土製円盤も1点(図8・156)出土している。実測点数は156点である。

4. 出土縄文土器の内容(図2～8)

縄文時代早期(1～3)

1は早期中葉の押型文土器の体部である。黄島式段階のものであり、楕円押型文を施す。2・3は早期後葉の条痕文土器であり、胎土に繊維を含み、器壁はやや厚い。2は波頂部をもつ波状口縁部が3片あるが、接合しない。縄文地に3条を単位とする押引沈線を鋸歯状に組み合わせて施し、口縁内外面に縦位の密な刻みを施す。野島式か。3は体部が3片あるが、接合しない。撚りの大きい縄文を地文に施し複数条の沈線を横位に施す3aと、斜位の押引沈線を密に施す3bがある。茅山下層式か。

縄文時代前期(4～9)

いずれも器壁は薄く、内面にはナデ調整を施す。4・5は前期中葉の羽島下層Ⅱ式の体部であり、二連規制のD字形爪形文を横位に施す。6・7は前期中葉の北白川下層Ⅱa式の体部である。複数条のC字形爪形文を横位に施す。6には爪形文の上位に、1条の横位の刺突と刻みを施した1条の隆帯が認められる。8・9は縄文のみを施す体部であり、北白川下層Ⅱ・Ⅲ式の所産と思われる。9は推定最大径約9.5cmを測り、羽状縄文を施す。

縄文時代中期(10～128)

a. 船元Ⅱ式(10)

10は波状口縁部の波頂部である。1条の幅広の爪形文を口縁に沿って施し、内面には縄文を施す。

b. 船元Ⅱ式古段階(11～48)

11・12は波状口縁部である。11は幅広の爪形文を口縁端部外面に施し、その下位に口縁に沿って円形刺突を施す。12は地文に浅い条痕を施し、口縁に沿って押引気味の円形刺突を施す。内面は縄文を施す。

13～48は地文に縄文を施したのち隆帯を貼付し、さらに隆帯上に刻みを施すことを指標として分類した。隆帯は断面が三角形あるいは半円形を呈するものが多く、刻みは半截竹管状工具やヘラ状工具などを用いて施す。13～23は波状口縁部、24～37は平口縁部である。24・25は平口縁に突起が付着する形状と判断した。ほとんどが破片のため、口径が推定できるものは27のみであり(約34cm)、また文様構成の判明するものも少ない。外面の施文で特徴的なものには、押引沈線を施す20・22・37と、二枚貝の殻頂部

を用いた押圧を口縁に沿って施す32がある。このほか、基本的に口縁端部には縄文あるいは刻みを、口縁内面には縄文を施す。口縁内面の縄文は、波状口縁では段状肥厚帯に施文するものが多いが、平口縁では段状肥厚帯を設けずに幅の広い縄文を施すものが多い。そのほか、30は口縁内面に幅広の縄文を施した後、口縁に沿って1条の刻みを横位に施す。また、33は口縁内面に縄文のかわりに斜位の曲線を施す。文様構成などから、13・14および25・26はそれぞれ同一個体と思われる。38～48は体部であり、いずれも縄文地に刻み隆帯を施す。

c. 船元Ⅱ式新段階(49～58)

地文に縄文を持たないものが多く、また古段階に比べ、隆帯の貼付が粗略となる傾向にある。そのほか、隆帯上の刻みが雑になったり、素隆帯となったりする。49～53は波状口縁部、54は平縁部であり、いずれも口縁端部に刻みを施す。口縁内面には段状肥厚帯を設けずに縄文を施すものが多い、54は口縁内面に縄文を施したのち、さらに2条の刺突を斜位に施す。また49はやや大きめの破片であり、刻み隆帯により円形と三角形を組み合わせた文様を描く。55～58は体部であり、このうち57は屈曲部である。

d. 船元式(59～79)

59・60は背の高い素隆帯を密に貼付して文様を描く。59は波状口縁部であり、素隆帯により複数の方形区画を形成するもので、口縁端部および口縁内面の段状肥厚帯に縄文を施す。60は体部であり、複数の素隆帯を縦位に並列して貼付する。

61～76は縄文地に素隆帯を貼付し、さらに半截竹管状工具による平行沈線文を隆帯に沿って施す。61～63は波状口縁部、64～66は平口縁部である。口縁端部や口縁内面の段状肥厚帯に縄文を施すものが多い。67は、端部は残存しないが外面の文様構成や内面の縄文施文から口縁部と思われる。66は地文が縄巻縄文であることからすれば、後述の船元Ⅳ式に含めるべきかもしれないが、素隆帯の貼付を優先指標として、こちらに分類した。68～76は体部である。

77～85は、縄文地に半截竹管状工具による平行沈線文のみを施すものである。平行沈線の施文とともに素隆帯を貼付する先の一群とは、必ずしも時期差を示すとは限らないようである(泉1988)。77～82は

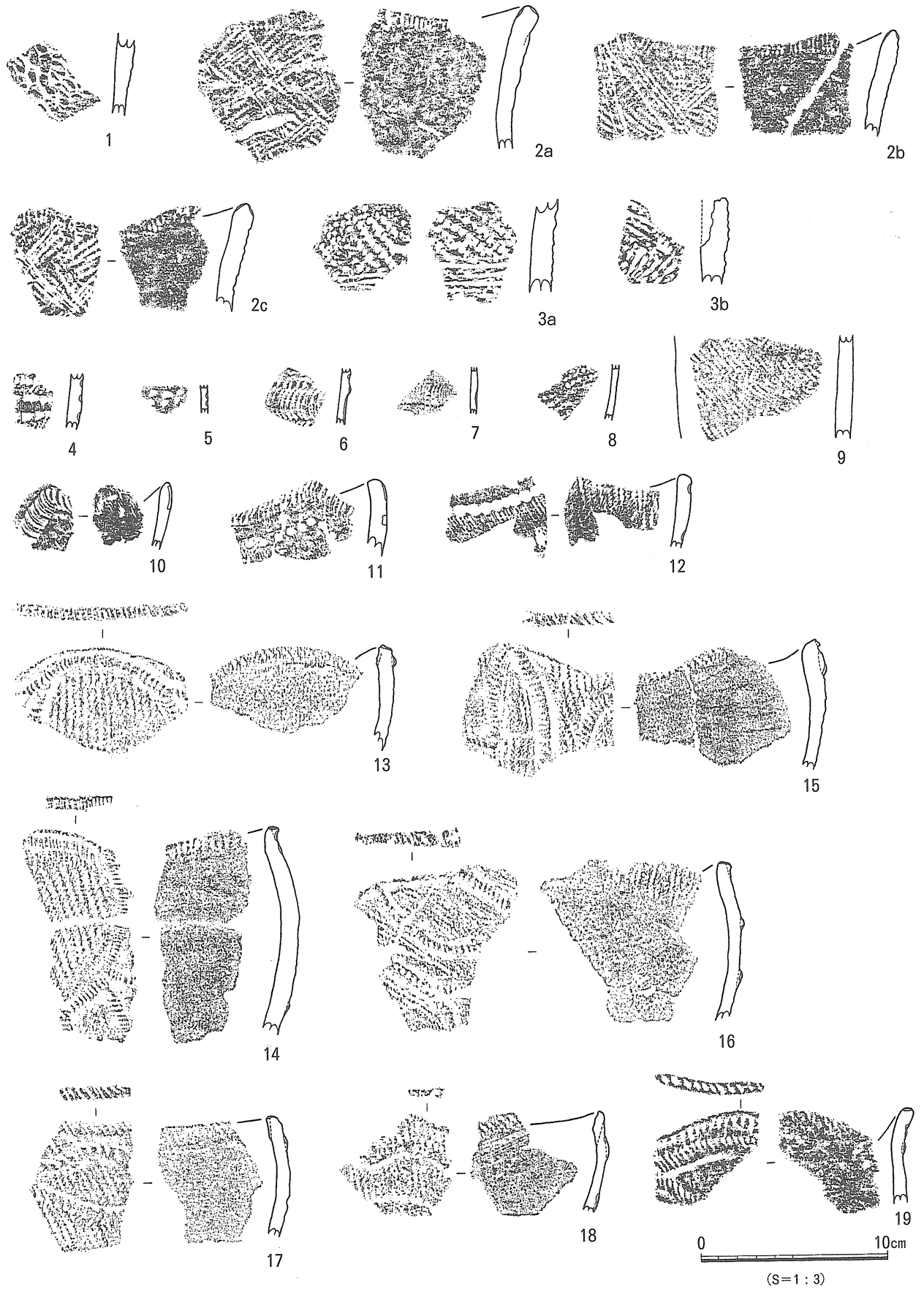
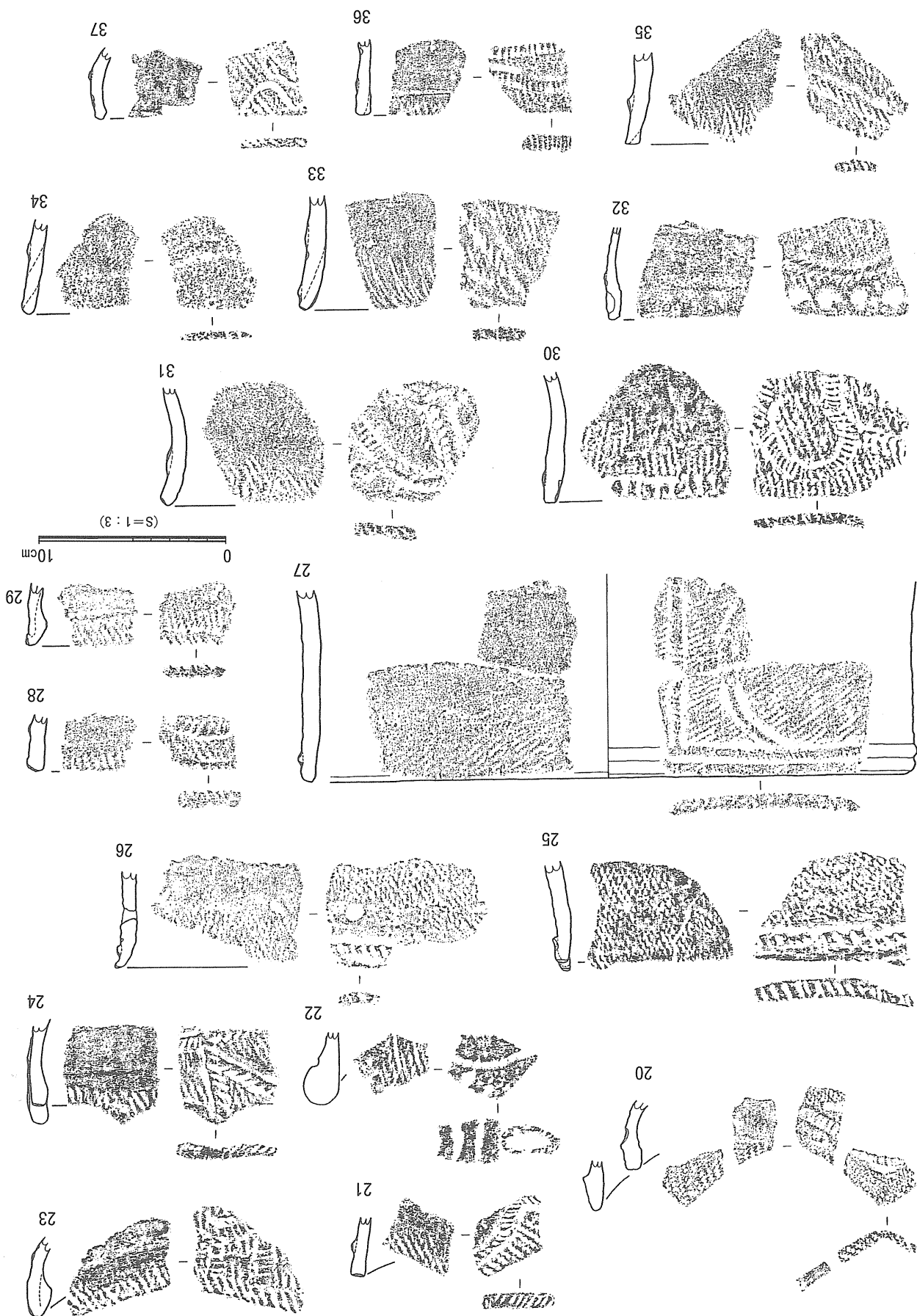


図2 北大津遺跡出土縄文土器 (1)

图 3 北大津遗址出土绳文土器 (2)



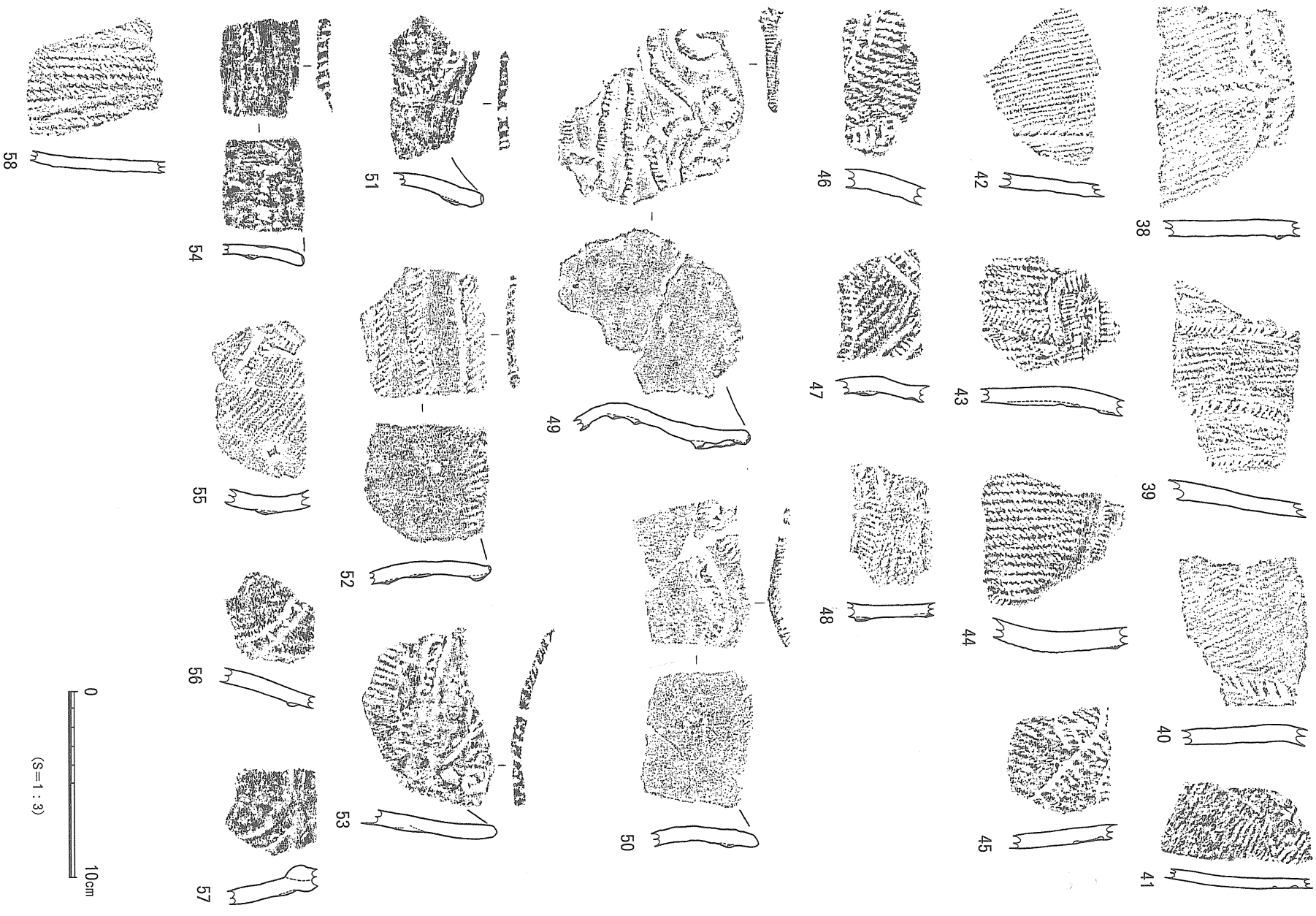


図 4 北大津遺跡出土縄文土器 (3)

平口縁部であり、口縁端部および口縁内面に縄文あるいは刻みを施すものが多い。83～85は体部であり、83は緩い屈曲部と思われる。77・83は、複数条の平行沈線により連弧文を描く文様構成が認められる。

e. 船元Ⅱ・Ⅲ式の縄文施文土器(86～94)

86～94は地文の縄文のみが認められるものであり、船元Ⅱ・Ⅲ式の所産と思われる。86～90は平口縁部であり、口縁端部や口縁内面に縄文や刻みを施すものが多い。86は内面の条痕調整が残存する。91～93は体部である。91は傾きから屈曲部以下の部位と思われる、また92は縄文施文が途切れることから、底部付近の部位と思われる。94は底面がすべて残存する底部であり、底径は約5cmを測る。体部と底面に指頭による押圧が複数見られる。

f. 船元Ⅳ式(95～111)

縄文縄文あるいは撚糸文を地文に施すことを指標として分類した。ただし、撚糸文を施すのは104のみである。95～104は平口縁部、105は波状口縁部である。96～98には半截竹管状工具による平行沈線文が、105には1条の刺突が認められる。口縁端部に縄文あるいは刻みを施すものが多い。また口縁内面に段状肥厚帯を設けて縄文を施すものが多いが、101は段状肥厚帯を設けずに2条の刺突を横位に施す。また102・103は口縁部が直立するもので、面取りした口縁端部に縄文を施し、口縁内面に幅広の縄文を施す。106～109は体部であり、このうち106・107には半截竹管状工具による平行沈線文が認められる。109は緩い屈曲部である。110・111は底部である。

g. 中期中葉・後葉の搬入土器(112～128)

文様・胎土・色調・器面調整などの特徴から、他地域からの搬入土器と思われる一群である。

112～118は中期中葉の中部高地系の土器である。赤褐色の色調や厚い器壁、器面に施した磨き調整などが特徴的である。112は口縁部2破片が出土した。渦巻状把手を持つ平口縁部であるが、把手の単位は不明である。狭い口縁部文様帯には、平行沈線間に交互刺突を施す。大きく屈曲する部位の上位には蓮華文を、下位には刻みを施し、無文部へとつながる。113は体部であり、傾きから胴部下部分の部位と思われる。半隆帯により縦位に区画されたパネル文を描く。区画内は規則的に蓮華文で充填する。112・113

は藤内式の所産と思われる。114は平口縁部であり、口縁に沿って1条の隆帯を貼付し、その下位に1条の隆帯を蛇行して貼付する。さらにその下位の屈曲部には、隆帯を眼鏡状に貼付する。これらの隆帯上にはいずれも刻みを施す。眼鏡状隆帯から、井戸尻式の所産と思われる。115は波状口縁部であり、波頂部下に縦位に隆帯を添付し、隆帯上には刻みを施す。116・117はともに平口縁部であり、棒状工具による押引状の連続刻みを施す。117は、横位に施した2条の連続刻みの間に蛇行沈線文を施す。118は波状口縁部であり、複数条の蛇行沈線文を縦位に施す。115～118は小破片のため、詳細な時期の比定はできなかった。これら勝坂式土器と在地の船元式土器との供伴関係は、藤内式(112・113)が船元Ⅲ式、井戸尻式(114)が船元Ⅳ式と考えられる。

119～126は中期中葉の東海系の土器である。いずれも色調は黒灰色から褐色を呈し、器壁は薄く、焼成は硬質である。119・120は山田平Ⅱ式の体部である。断面半円形の隆帯を横位に貼付し、その上に爪形文を密に施す。121・122は山田平Ⅲ式の口縁部である。121は平口縁部であり、口縁外面に横位に施した平行沈線の下位に、逆U字形の沈線文を縦位に並列して描く。122は、122aが上位に、122bが下位になる器形を呈する。平口縁部であり、半截竹管状工具による半隆帯により文様を描く。口縁部には、口縁外面に1条の半隆帯を施し、その下位に左傾する半隆帯を並列する。その下端に連弧状の半隆帯を施す。緩く屈曲したのちの胴部には、口縁部と同様に、左傾気味の半隆帯と連弧状の半隆帯を施す。123～126は北屋敷式前半期である。ペン先状工具を用いた押引沈線と隆帯により文様を描く。123～125が波状口縁部、126が平口縁部である。123は波頂部から垂下する隆帯を貼付し、それに連なる連弧状隆帯により区画を作り、その区画内を押引沈線により充填する。連弧文の下位には三角刻みを施す。124は口縁に沿って1条の隆帯を貼付し、波頂部下に2つの円形隆帯を上下に貼付し、さらに波頂部から垂下して横位に連なる隆帯を貼付する。隆帯間は押引沈線により充填する。125も同様に押引沈線と隆帯により文様を描く。126は大きく屈曲したのち、口縁部が内傾して立ち上がる器形を呈する。屈曲部から

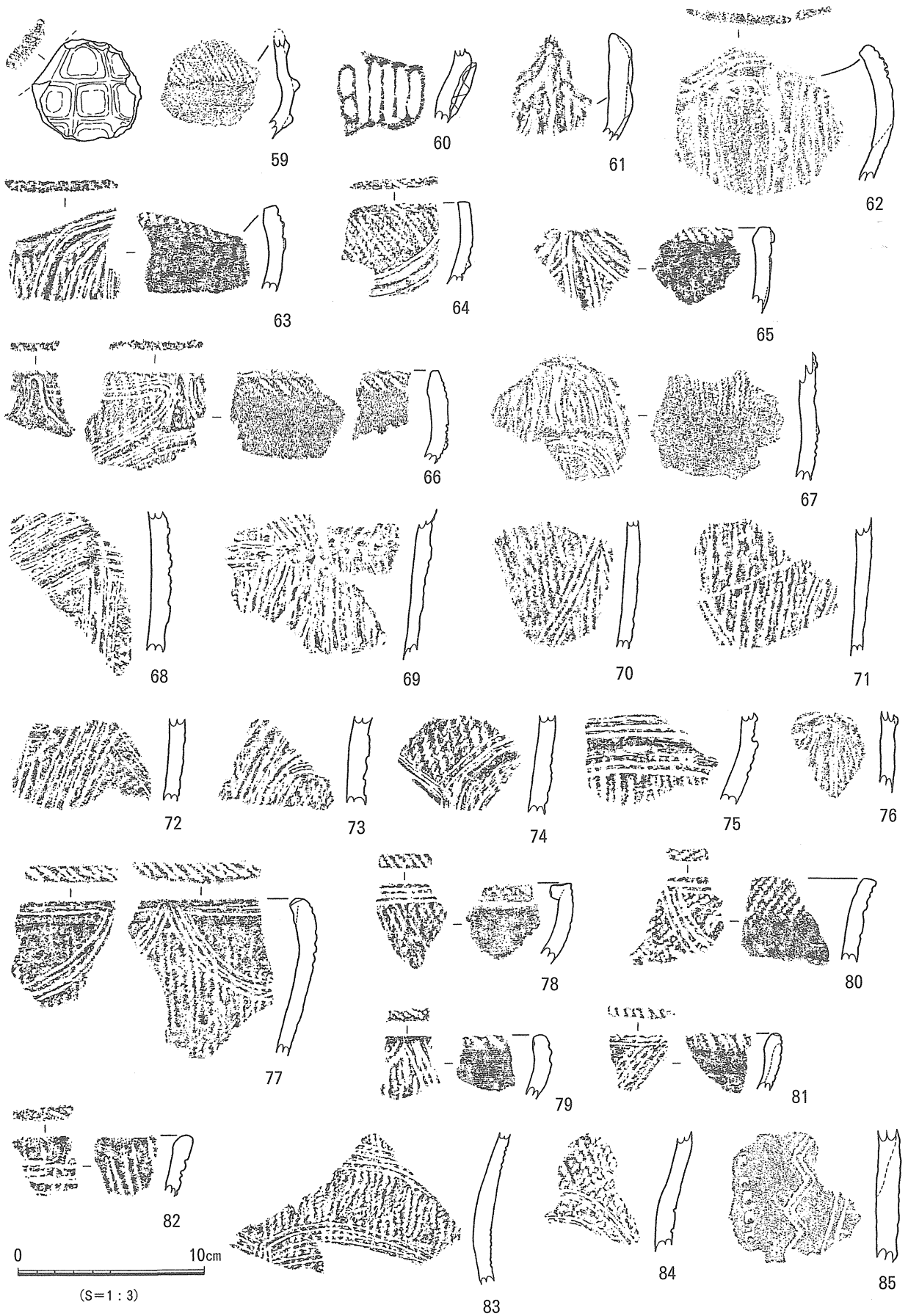
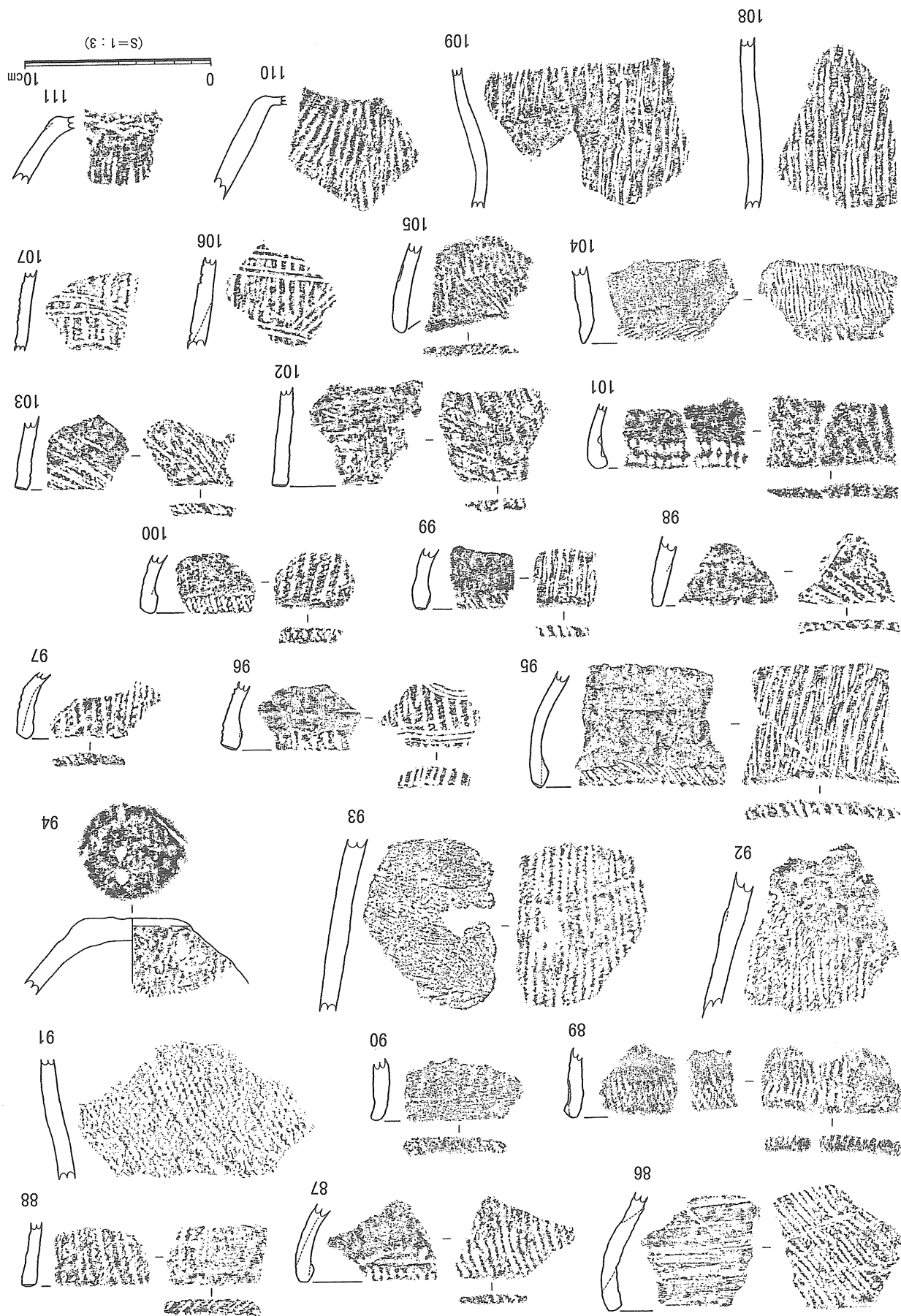


図5 北大津遺跡出土縄文土器 (4)

图 6 北大津遗址出土陶文土器 (5)



隆帯を貼付して肥厚した口縁からまでが口縁部文様帯となる。ほぼその中央に隆帯を蛇行して貼付するが、その上下には押し沈線を充填する。これら東海系土器と在地の船元式土器との供伴関係は、山田平Ⅱ式(119・120)が船元Ⅱ式古段階、山田平Ⅲ式(121・122)が船元Ⅱ式新段階、北屋敷式前半期(123～126)が船元Ⅲ式と考えられる。

127は中期中葉の北陸系の土器である。白色の色調を呈する。隆帯を貼付して屈曲部を形成する体部で、隆帯の上面には楔形刻目文を施す。隆帯の下位は無文となる。新崎Ⅱ式あるいはⅢ式と思われ、船元Ⅱ式新段階に平行すると考えられる。

128は中期後葉の東海系土器である咲畑式の体部である。推定最大径は約25cmを測る。屈曲部に沈線により4条の連弧文を描き、その下位の球状の胴部には、やはり4条を単位とする沈線文を鋸歯状に描き、その間を刺突により充填する。

縄文時代後期(129～138)

129は沈線区画内に縄文を施した体部であり、後期前葉の中津式である。124は平口縁部である。肥厚した口縁端部に1条の沈線を施し、口縁外面は無文である。後期前葉の福田KⅡ式である。

131・132は後期中葉の北白川上層式3期の所産である。131は波状口縁を呈する浅鉢であり、口縁端部は内面に肥厚させて面を作り、そこに細沈線により文様を描く。細沈線には中に刺突を施すものもあり、波頂部には渦巻文を描く。132は平口縁部で、口縁端部に小突起を持つ。外面には5条の磨消縄文を横位に施す。口縁内面は1条の横位に施した沈線により区画され、区画内には縄文を施す。

133は屈曲を持つ体部であるが、傾きなどから波状口縁部直下と推測される。2条の浅い凹線を施し、その下位の屈曲部に浅い斜位の刻みを施す。後期後葉の元住吉山Ⅱ式である。134・135は複数条の浅い凹線を横位に施す。後期後葉の所産と思われる。136は無文の波状口縁部で、体部に屈曲を持つ。137は屈曲を持つ体部だが、傾きなどから波状口縁部直下であると推測される。屈曲部上位に隆帯を貼付する。138は平口縁部である。内外面には磨き調整を施し、面取りした口縁端部には縄文を施す。136～138は後期中葉から後葉にかけての所産と思われる。

縄文時代晩期(139～150)

いずれも晩期後葉の凸帯文土器である。139～145は滋賀里Ⅳ式であり、細い凸帯を貼付しその上に小さ目の刻みを施す。139～143は口縁部であり、いずれも口縁端部に刻みを施し、口縁外面に1条の刻み凸帯を施す。143の内面には、条痕調整が明瞭に認められる。144・145は体部であり、体部に1条の刻み凸帯を施す。145の推定最大径は約27cmを測る。

146～150は滋賀里Ⅴ式段階のものであり、1・2条の幅の太い凸帯を口縁直下に貼付し、その上に比較的大き目の刻みを施すものが多い。149・150は口縁端部が残存しないが、その傾きから、口縁部と思われる。このうち、149は凸帯に刻みを施さない。

縄文時代後期・晩期の無文土器(151～155)

いずれも縄文時代後期・晩期の所産と思われるが、詳細な時期の比定はしていない。151・153が平口縁の深鉢、152が波状口縁の深鉢、154が平口縁の浅鉢と思われる。153は推定口径は約28cmを測り、内外面に条痕調整が残存する。155は深鉢の体部である。**土製円盤(156)**

船元Ⅱ式土器の体部片の周囲を打ち欠き、円形に成形したものである。直径約5cmを測る。

5. 縄文時代の北大津遺跡

以上検討してきた縄文土器のあり方を中心に、北大津遺跡の概期の様相について、若干述べてみたい。まず、縄文時代早期中葉から晩期後葉の各時期の遺物を確認できたことが指摘できる。したがって、(小島2001)における概要および消長の表における北大津遺跡の項目は、訂正する必要がある。

中心となるのは、中期中葉から後葉にかけての船元Ⅱ～Ⅳ式である。周辺地域で概期の遺物が出土した遺跡は、北東約3.5kmに位置する大津市穴太遺跡と粟津湖底遺跡(粟津第3貝塚)がある(図1)。穴太遺跡では包含層から少量の遺物が出土しているのみである。一方、粟津第3貝塚からは、船元Ⅰ・Ⅱ式土器がまとまって出土しており(瀬口ほか1997)、北大津遺跡とは、船元式を軸に中心時期が推移しているようにもみえる。船元Ⅱ式土器は県内各地で出土しているが、まとまった数量が出土した遺跡には、ほかに坂田郡米原町筑摩佃遺跡がある。

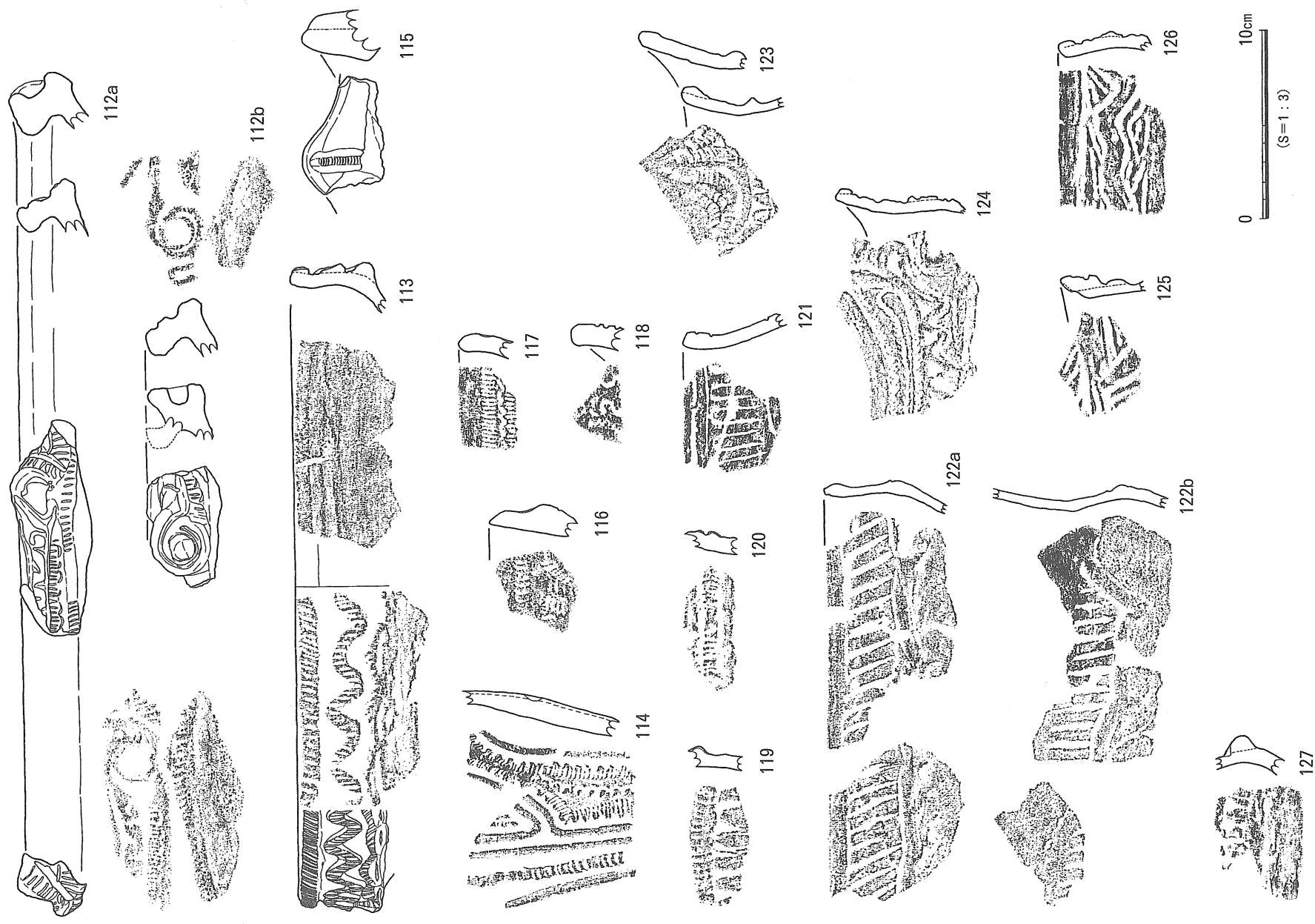


图7 北大津遺跡出土縄文土器 (6)

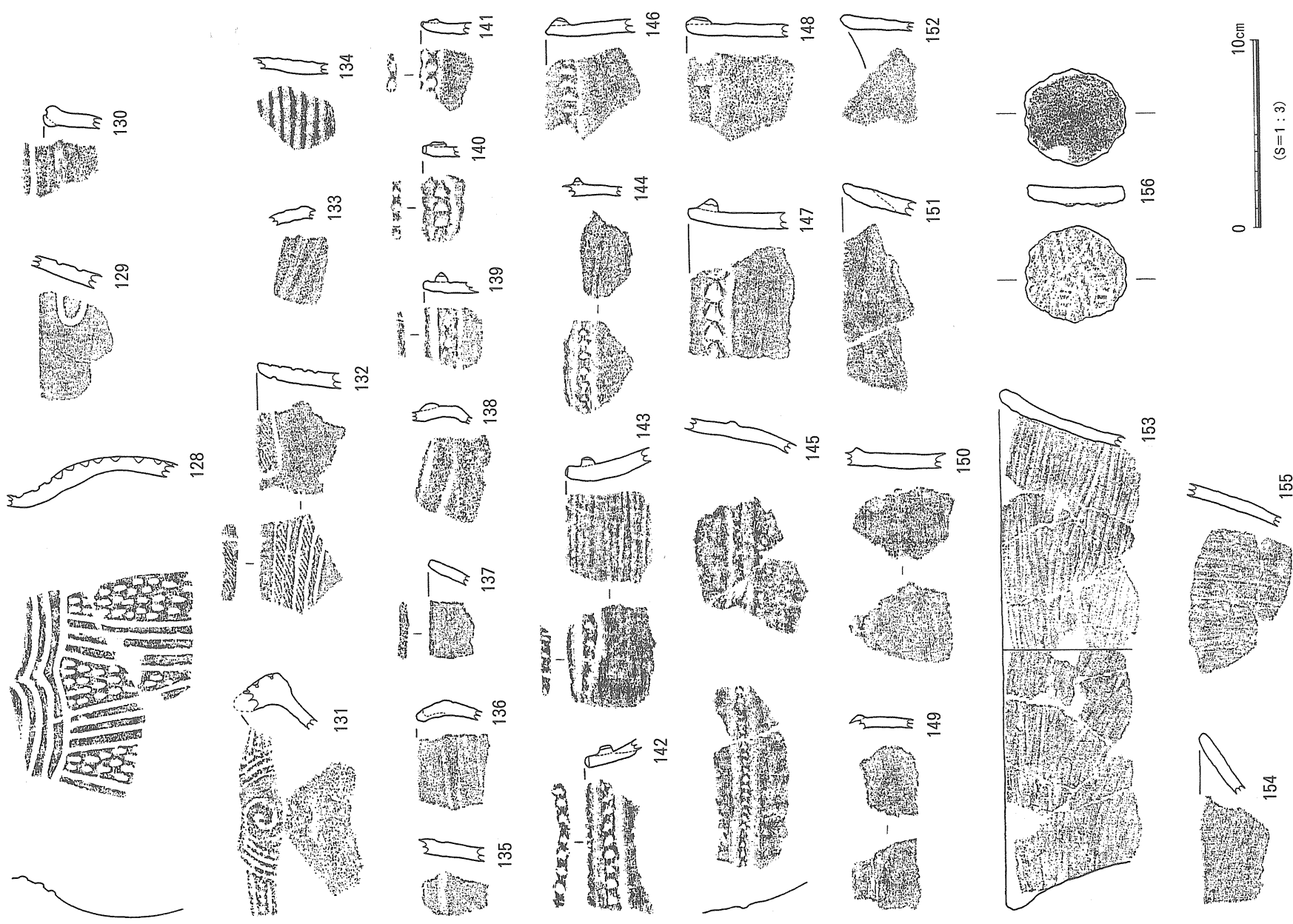


図 8 北大津遺跡出土縄文土器 (7)

また、中期中葉から後葉の中部高地・東海・北陸各地域の搬入土器も確認された。縄文時代の近江地方では、時期を問わず搬入土器が確認されるが、概期のものは類例が少なかった。とくに中部高地系の土器は類例が少なく、ほかには神崎郡能登川町大中の湖東遺跡などで見られる程度である(植田1990)。

以上のような縄文土器のあり方からすれば、縄文時代の北大津遺跡は、中期中葉から後葉にかけて最も大きな集落が営まれたと考えられる。また概期における近接各地方の搬入土器の存在は、各地との活発な交流の産物と考えられる。この点に関しては、今回は整理対象としなかった剥片石器の石材について検討することも、今後の課題である⁽⁴⁾。ただし、いずれの遺物も遺物包含層からの出土であり、また、明確な遺構の存在を確認していないため、これらは状況証拠にしか過ぎないのかもしれない。しかし、滋賀県内各地や隣接地域における遺跡の様相を考えると、北大津遺跡が概期における拠点集落の一つと、現段階では指摘できよう。

6. おわりに

最後に、北大津遺跡の近接地で実施された注目すべき調査例について紹介しておきたい。平成13年(2001年)に、大津市教育委員会により西大津駅の北約150mの地点において発掘調査が実施され、多数の縄文時代遺物が出土した。遺跡名は錦織遺跡となる。未報告資料ではあるが、大津市教育委員会のご好意により実見させていただいたところ、縄文土器は早期後葉から晩期後葉のものが認められた。このうち主体をしめるのは前期中葉の北白川下層Ⅱa式と中期中葉の船元Ⅱ・Ⅲ式であり、そのほかの時期のものはきわめて少なかった。また、中期中葉の搬入土器も少なからず確認できた。これらは、船元Ⅳ式と北白川下層Ⅱa式の出土量に違いがあるものの、本稿の検討資料とほぼ時期的に重複する。遺跡名は異なるが、同一の縄文時代集落の広がりとして認識してよからう。

(こじま たかのぶ：財団法人滋賀県文化財保護協会)

謝辞

本稿の執筆にあたっては、同僚の中村健二氏・藤

崎高志氏・瀬口眞司氏・鈴木康二氏、並びに加藤賢二氏、吉水眞彦氏・福田敬氏(ともに大津市教育委員会)をはじめとする多くの方々に、資料の実見などに際して様々な便宜を図っていただき、また多くの貴重な助言をいただきました。文末ながら、感謝いたします。

註

- (1) 新出資料などの追加については、「補遺編」として本『紀要』誌上に今後掲載していく予定である。
- (2) ここに「縄文時代前期の包含層」とあるが、後述のように、縄文時代前期の土器はきわめて少量しか認められなかった。したがって、出土縄文土器の大半を占める、縄文時代中期の包含層の誤認と思われる。
- (3) 一部の縄文土器は、滋賀県立安土城考古博物館において保管されている。これは『近江の縄文時代』への出品用に抜き出されたものがそのまま保管されているものであるが、滋賀県立安土城考古博物館の許可を得て、これらについても図化・掲載した(13・26・32・62・85・112~114・124・129・153がそれに当たる)。
- (4) 肉眼観察では、ほとんどが二上山産サヌカイトであったが、一部に金山産サヌカイトも認められた。

引用・参考文献

- ・泉 拓良「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観』3 中期小林達男編 小学館 1988
- ・植田文雄「今安楽寺遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書』第17集 能登川町教育委員会 1990
- ・小島孝修「近江における縄文社会の展開過程に関する覚え書き - 地域の検討6. 湖西南部地域 -」『紀要』第14号 財団法人滋賀県文化財保護協会 2001
- ・滋賀県教育委員会『昭和48年度 滋賀県文化財調査年報』1975
- ・滋賀県教育委員会『昭和49年度 滋賀県文化財調査年報』1976
- ・滋賀県教育委員会『平成7年度 滋賀県遺跡地図』1996
- ・滋賀県立近江風土記の丘資料館『近江の縄文時代』1974
- ・瀬口眞司ほか「粟津湖底遺跡第3貝塚(粟津湖底遺跡)」『琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書』1 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1997
- ・田辺昭三ほか『湖西線関係遺跡発掘調査報告書』滋賀県教育委員会 1973
- ・中西常雄『北大津の変貌-弥生時代から古墳時代へ-』1979
- ・山下勝年「列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望 東海地方 中期前半」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会 1999

編集後記

今年度も、全国の遺跡で数多くの発見が新聞紙上を賑わせました。県内においても、膳所城下町遺跡・鍛冶屋敷遺跡をはじめとして多くの遺跡調査で成果を挙げることができました。そして現地説明会では、多くの考古学ファンや地元の方々に見学していただくことができました。

今号に掲載されている論考は、遺構・遺跡論から保存科学と幅広く、多岐にわたり、今年度の発掘調査に関連する最新情報や成果を反映させたものも含まれています。これらの論考が、埋蔵文化財の調査に携わる者の一助となり、我々の仕事である文化財の保護・普及活動の一翼を担っていくものと信じております。

m()m

平成15年(2003年)3月

紀 要 第 16 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会

大津市瀬田南大萱町1732-2

電話 (077)548-9780・9781

FAX (077)543-1525

URL <http://www.shiga-bunkazai.jp/>

E-mail mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本 (株)スマイ印刷工業

栗東市川辺568番地2

TEL 077-552-1045